



インタビュー・ 岩崎 淑先生

私の学んだ世界の名演奏家たち

今演奏活動に最も忙しいピアニストの一人、チャイコフスキーコンクールで、伴奏特別賞を受賞され、最近ではチェロのシュタルケルとの共演で、絶讃を得られたことなど記憶に新しい。1月の〈東音〉ピアノゼミナールでピアノといろいろな楽器とのアンサンブルについて御指導いただくに先立ち、12月のある日岩崎淑先生のお宅を訪ねた

カザルスと

—— 先生は、学生音楽コンクールで文部大臣賞を受けていらっしやるんですね。そういうことが、外国へ行くきっかけになっていらっしやるのでしょうか。

岩崎 外国へ行ったのは、まったくの偶然なというか、ほんのちょっとしたきっかけからなんです。

—— 音楽を学んでいらっしやる方の中には、留学したいと考えていらっしやる方が大勢いらっしやると思いますので、ぜひお聞かせください。

岩崎 私17才の頃、日本のある所で、クラシックのピアノ演奏を弾くアルバイトをやったことがあるのです。その時聞きに来ていらしたあるアメリカの方が、もし留学したい希望があるならば、テープを送って来なさいといっておっしゃったのが、きっかけなのです。ところが、その当時は、ジュリアードやカーティスに留学するといっても夢のような気がしていて、まったく実感がなかったものです。

桐朋の2年生の時、毎日音楽コンクールで、失敗をやって入賞できなかったできごとが起って、そこで、かつてアメリカの方にいわれた言葉を思い出し、お手紙を出したのです。

—— そして、ハートフォード大学音楽学部に進まれたということですね。

岩崎 そうです。1962年のことでした。

—— 留学なさろうとしている方々にとっては、その費用についても関心事だと思のですが、先生はどのようにされましたか。

岩崎 お金がありませんでしたから、飛行機なんかで行きませんでしたよ。一生懸命アルバイトをして。そして13日間もかかって貨物船で行きました。アメリカでは、そのアメリカの方が、スポンサーになって下さり、大学ではスカラシップをいただきました。

—— 先生は、アンサンブルピアニストとして今日世界に名を知られるようになったわけですが、初めからそのおつもりだったのでしょうか。

岩崎 いえ、最初アメリカへ渡った時は、ピアノソロを勉強するつもりで行きました。

アンサンブルピアニストになったのは、運命的なものがあるかもしれません。

私の最初のデビューというのが、5才の時、バイオリニストであった私の父、岩崎 千蔵と一緒にモーツァルトのバイオリンソナタを、台湾、台南放送で演奏したのが最初でしたから。

—— 5才でもう、モーツァルトなんか弾いていらしたのですか。当時天才少女現わるなんていわれたのでしょうか。それで、アンサンブルピアニストとしての歩みは？

岩崎 父がバイオリニストでしたから、小さい時から、バイオリンとのアンサンブルはやっていたわけです。そして、篤見三郎先生のお弟子さんの会なんかに、よくでていました。

アメリカのハートフォード大学でも、その学校はピアニストを養成するというよりも、教育者を養成するといった環境でしたから、ピアノを鳴らせるという学生が少なかったので、バイオリンやチェロの伴奏をよく弾かされてきました。

室内楽をボザート・トリオのバーナード・グリーンハウス先生、ピアノをジェユブ・ラタイナに学び、大学を卒業したのが1964年です。

それからジュリアード音楽院に行ったのですけれど、やはりピアノソロ科にはいり勉強したわけです。その一方、ソナタクラスとあって、この点が日本の音楽学校に少い点だと思うのですけれど、室内楽のクラスを必ずとらなくてはならないので、バイオリンソナタとか、チェロソナタを勉強したわけです。

ジュリアードに行ってもなく、弟の泷が来たものですから、ジュリアードで最初の演奏したのはチェロソナタでした。

それから、バイオリンの卒業演奏の伴奏を受け持ったり、これもアルバイトなんですけれども、バイオリンの先生から、レッスンのピアノ伴奏者に使いたいからといわれて、一年間ジョセフ・フックス先生のクラスの伴奏を務めたのです。

—— そこで、初見の勉強をずい分されたわけですね。

岩崎 ええ、本当に勉強になりました。

—— それからは？

岩崎 その頃からポツポツ、アンサンブルのお仕事はあったわけですが、1963年の夏のことでしたか。メイン州のブルーヒルにあるカインザル室内楽のサマースクールで、——これも試験を受けて、奨学金を得て行ったのですが——アルトゥール・バルサムという現在アメリカで、一・二といわれるアンサンブルピアニストに、レッスンを受けたことが、私の道を決定的にしたような気がします。

そしてそこに、ジュリアン・オレフスキーというバイオリニスト（日本に2度来ています）が、聞きに来ていらして、その秋の二週間の演奏旅行に、伴奏者として、私を抜擢してくださったのです。

その時、初めて飛行機でアメリカ大陸横断の演奏旅行をやりました。その演奏旅行の中で、ワシントン州のスポケーンでやった演奏会は、8年振りに女流ピアニストが来たということもあって、すごい好評を得ましてね、生まれて初めて新聞に評をいただいたわけですね。

—— アンサンブルピアニストとして歩み初めたわけですね。それからどういう方々と。

岩崎 そうですね。それまで弟の岩崎洗とやっていたことなんかは認められて、1965年の夏、プエルトリコのカザルス音楽祭に、全米から6人だけ選ばれ、参加した時のことです。カザルス御夫妻の前で演奏するわけですが、バイオリン2人、チェロ2人、ピアノ2人、その中に、弟と私、バイオリニストの中に、今若手でアメリカで最も囑望されているバイオリニスト ピンカス・ズッカーマンが、はいていたのです。当時彼は、17才の少年だったのですが、すでに大家の器があって、彼に出合ったことは、弟なんか、非常によい影響があったのではないかと思います。

それから、決して忘れられないことがあります。それは、1966年1月終りから3月にかけて、プエルトリコのカザルスのお宅で、個人レッスンを受けたことです。

これが、その時の写真ですよ。（カザルスと一緒に写っている写真を見せて下さる）

この時も、奨学金を得て、カザルスの個人レッスンを受けられたのですが、ジュリアードで、もうカザルスも高齢だし、こんなチャンスは2度とないだろうからといって長期欠席を認めてくれたので、学校をほっぽりなげに行ったのです。

弟を含めて4人のチェリリストたちが、レッスンを受けたのですが、その伴奏を私一人でやったので、カザルスの全レッスンに私は出席できたということになります。



時に、カザルスが、ベートーベンのチェロソナタなど全曲を、私の伴奏で弾いておしまいになる。この時の感激。なにしろ、カザルスの音楽につられて、私まできれいに弾けてしまうのです。

この時ほど、自分の力の無位さというか、カザルスの音楽があまりに偉大で、自分の存在がなくなったような気持ちになったことはありません。

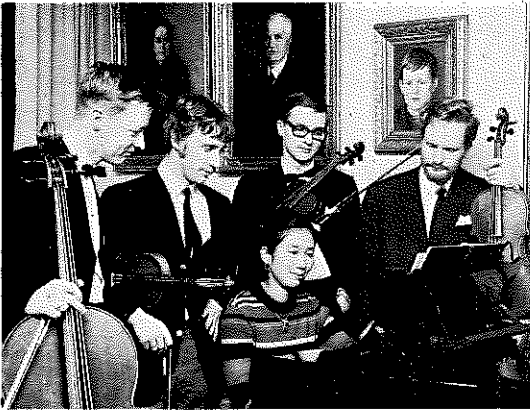
音楽のすばらしさ、偉大さ、厳しさ、この時得た感動は、今日の今でも、新しい感動をもって呼びおこされます。

—— カザルスのレッスンを受けたということは、岩崎先生にとって、一生を支配されるべきことでしょうかね。
岩崎 ええ、そりゃもう。その音楽に対する愛情と、音楽の厳しさ、新鮮さ、カザルスが、何百・何千回とリサイタルに弾いたといわれるソナタなのに、昨日、習ったばかり、というような新鮮さというか、若々しい息吹きでお弾きになる。

それは、ちょっと口では言いつくせない、すばらしい演奏でした。

そして、カザルスは、御自分の考えを押しつけないのです。生徒が、ちょっとやりにくそうな弓使いをしていましたら、「私は40年間この弓使いで弾いて来た。この弓使いでやってやりやすかったからやっごらんない。もしやりにくかったら、止めればよいから」と、その言い方でもなんでも、謙虚なことおびたしいのです。

ある時、よそから興味を持っている人々が、レッスンを聴きに来て、まったく愚かな質問をしたのです。「なぜ、あなたはそんなにチェロがお上手なのですか」と。そうしたら、カザルスは、まじめな顔して、「もし、あなたが上手だとおっしゃってくださるようなところがあるならば、それは、多分、ほんの少しばかりの神から才能の贈物(Gift)があったのと、私は若い時から、他の偉大なる芸術家たちの演奏を聴いたからなのかもしれません」とおっしゃって、決して、御自分が、よく練習したからなんておっしゃらないのですよ。



スホネン・カルテット メンバーと

—— カザルスは、その頃何才だったのですか。

岩崎 86才位でしょう。そんな高齢にもかかわらず、バッハの無伴奏ソナタなんか、ミスもなければ、止まることなく、実に流暢に演奏してしまわれるのです。「この曲はもう30年も弾いてないんだよ」なんて話され、「君たちが、こういうレパートリーを持って来てくれることは、私の若い頃を思い出させてくれて、大変うれしい」なんておっしゃりながら弾いて下さるのです。

それ以後、カザルスからレッスンを受けたチェロソナタを弾くたびに、あゝこゝは、こう弾かれたな、こうおっしゃったな、などと思い出新たによみがえってくるのです。

—— それから、先生と、洗さんとで、カーネギーホールでデビューされたわけですね。

岩崎 はい、1966年4月でした。

—— それからは？

岩崎 その夏、即ち1966年の夏、私本当に師に恵まれたと思うのですけれど、——夏は勉強したいと常日頃考えてカタログを見ていましたら、イタリアのシエナのキジアーナアカデミーで、ミケランジェリから講習するということを知って、無けなしのお金をはたいて、飛行機でイタリアへ渡ったのです。この時は、それこそ、ヒッチハイクもしましたよ。

ミケランジェリの講習に50人位来ていたのですけれども、試験を受けてまた奨学金を得、師事したわけです。

ミケランジェリもとてもすばらしかったのですけれど、そこで出会ったのが、セルジョ・ロレンツィ、この方は、今度カワイ楽器と桐朋で招く、アンサンブルピアニストで、私の本当の先生なんです。

彼のピアノを聞いてまたすばらしい。それは何故かといいますが、キジアーナ・クィンテットのメンバーで、10年位前、大阪フェスティバルに一度来日していますけれど、室内楽に徹して、すばらしい芸術家としてのお仕事をしていたらっしゃるということなんです。

その生き方に、私は共感を得たので、翌年、弟とともにロレンツィのクラスにまたはいって勉強したのです。

そこで、ソナタを8曲練習して、ミュンヘンの国際コンクールを受けたわけです。

—— その時は何位でしたか。

岩崎 世界から29組の参加者があってその中で三位でした。一位がソヴィエット、二位が地元のドイツ。この時大変不愉快な思いをしたのですが、一般の評判では、私達がもっと上位だといわれたのです。だけど、ここで国際コンクールというのは大変だということを知りました。

審査員に日本人はいませんものね。

—— それが1967年のことですか。

岩崎 そうです。この後ニューヨークに帰り冬の間洗との音楽会があったり、スイスのチェリスト、クラウス・ハイツ、彼とはニューヨーク・ボストンなどでもリサイタルをやりましたが、洗以外のチェリストでは、初めて音楽会を持ったわけです。

—— ブタベストのコンクールは、いつでしたか。

岩崎 1968年です。この時、一人だけ、伴奏特別賞をいただきました。これで、ますます、伴奏への道が深まったわけです。

この時、チャイコフスキーコンクールの審査員にもなられた、ダニエル・シャフランから、一生、弟洗とのコンビをくずさないで欲しいといわれました。

その時、またコンクールに参加していた、ヘルシンキのスホネン弦楽四重奏団の方が、私のピアノを聞いていて、協演してくれないかとさそわれまして、ヘルシンキに寄りまして、約1ヶ月演奏活動を致しました。

ラジオにでたり、ショスタコーヴィッチ、ブラームスのピアノ五重奏をやりました。

この時の第一バイオリンがオッコ・カムといって一昨年のカラヤン第1回コンクールで優勝し、今や新鋭の指揮者、彼のすばらしい才能と人柄に魅せられていた私の期待が見事に当って、こんな人と協演できた2年前を想い出すと胸が一杯になります。

—— そして昨年（今年からは一昨年になる）1969年につながるわけですね。

岩崎 そうです。昨年は完全に弟と組んで、演奏活動にはいったわけです。

—— 1969年11月、東京文化会館の大ホールでのリサイタルは、超満員で大好評を得ましたね。それ以後、協演された方々は？

岩崎 今年（1970年）またすばらしい思い出を持ったのは、モスクワのチャイコフスキーコンクールの審査員でもあった、ラド・アルドレスク、ルーマニアのチェリストが、イタリアのシシリー島タルミナで自分のマスター

クラスをやっているからよかったら、私と一緒に弾きませんかと、さそってくださいだったので。

これで、1970年6月のチャイコフスキーコンクールのあと、イタリアへ行き、アルドレスクと協演いたしました。彼は、日本ではあまり知られておりませんがこれまたすばらしいチェリストで、共産圏では、最も優れたチェリストとして知られているということです。

——チャイコフスキーコンクールで洗さんとお二人で三位をとられ、淑先生、また特別賞を受賞されましたね。

最近、チェロのヤノシュタルケルとの協演で、大好評を得られましたが、シュタルケルとは、以前からのお知り合いですか？

岩崎 いえ、シュタルケルを呼んだマネージャと私のマネージャが同じ神原さんで、こういうピアニストがいると手紙を書いてくださったので、ではピアニストはつれて来ないということになったのです。

このシュタルケル、またまたすばらしく、世界の大家といわれる演奏家の壁の厚さに、さらに驚異を感じました。いかにして彼らに近づくか、いえ、そのすばらしい演奏をこわさずについていけるかと。

——リヒテルともアンサンブルされたのでしょうか。

岩崎 そうそう、9月にバイオリンの徳江比早子さんのリサイタルの為に準備していた時に、リヒテルが来日したのですけれど、リヒテルと一緒に来日した指揮者のルドルフ・バルシャイ、この方は、チャイコフスキーコンクール入賞者によるコンチェル演奏会の時、ハイドンのチェロコンチェルトを指揮してくださった方で知っていて、また徳江さんもソヴィエットに留学していて知っていたことから、お食事にお招きしたのです。

そして、リヒテルから電話が、かかってきて、翌日のN響とのコンチェルトにそなえ、だれかピアニストと練習をしたいというので、私にと声がかかったのです。

私、リヒテルが弾くモーツァルトのピアノコンチェル

トは弾いたことがないので自信がなされたのですけれど、彼のほとぼしる芸術を目のあたりに触れることができるだけでもよいと思って、ホテルニューオータニに、かけつけました。

彼のルームに、2台のピアノが置いてあって、そのまん中に、バルシャイが立ち、私がオーケストラパートを受け持って弾きました。

お蔭様で一度も止まることなく、ついて行けとでもよろこんで下さいました。

そして彼の息とビタリと合った時のうれしかったこと。彼から学んだ一番大きなことは、フレーズの長いこと、これでも続くかという位、フレーズを長くつづけてうたうということでした。

——リヒテルと一緒にピアノが弾けたなんて、本当に本当に幸なことでしたね。

来年(1971年)の御予定を伺わせて下さい。

岩崎 1月17日 日生劇場音楽シリーズ「バイオリンソナタの夕」徳江比早子さんと。18日〈東音〉ピアノセミナーの後、24日にソヴィエットに発ち、リガ、キエフ、レニングラード、モスクアなど7ヶ所で洗と演奏、2月26日ヘルシンキのシベリウスアカデミーで洗とリサイタル、3月19日アメリカ留学したバイオリン柳田昌子さんのリサイタル、4月9日と16日は、フランスから来日のバイオリニスト、クリスチャン・フェラスリサイタル、5月7日イタリアの師口ロレンツィ先生を迎へ二台のピアノのための曲を含めた室内楽の夕、6月19日には、ポストン響から日フィルへ交換団員として来日中のショットンさんのピオラリサイタルなど、その間、洗とのリサイタルも各地であります。

——先生、どうもいろいろ有難うございました。来年の御活躍をお祈り申し上げます。1月18日(月)の〈東音〉ピアノセミナーは、リサイタルと違ってこれまた楽しみにいたしております。

第38回〈東音〉ピアノゼミナール

岩崎 淑 公開レッスン

主題 ピアノと他楽器との合奏

日時 1月18日(月) P.M. 6:30

会場 渋谷カワイサロン

受講者	亀井 良 幸 (Cl)	ブラームス作曲 クラリネット ソナタ op.120 No.1 1楽章
	天野 頌 子 (P)	
小林 文 夫 (Fl)	モーツァルト作曲 フルートとチェンバロのためのソナタ K14 K15 1・2・3楽章	
		高橋 雪 子 (P)
境野 建 弥 (Horn)	モーツァルト作曲 ホルン協奏曲 3番 K447 1・2・3楽章	
		谷口 明 子 (P)